春

いつでも
突然に
まるでストーカーのように
彼は微笑しながら目の前に現れる

「どうですか。私はいつでもあなたの傍に居る。
いつでもあなたのことを見守っている。」

風が僕を避けて吹き過ぎる代わりに
黒光りするカラスが追いかけてくる

ヘドロが乾燥して粉となったような塵
この時期に吹く南風は不思議だ

ただ、春の日が暮れてゆく
複眼を通して見える光景のような春の日が

言葉の力を冒涜する僕には
大気に満ちる時間を詠う資格などない

許されるなら
ひたすら、この季節を渡り歩きたい

別に誰彼のようになりたいとは思わない
自分でありたいなどとも思わない

「上向け、上」
競争を強要された教育の残骸たる社会

あなた方が消し去ったものを数えてみるがいい
僕たちには、元々故郷など存在しないことが分かるだろう

別に幸福でいたいとは思わない
普通でありたいとも思わない

滅びることを受け入れること
なぜ信じ続けるのか理解できない

なんだか、すっかり分からなくなった
生と反比例する意思が眠りに傾いている

別に寂しいわけではない
この嫌悪感は何処から来るのか

心には隙間が必要なのに
そこに向けて微細な塵が大量に入り込んでくる

あたかもカモフラージュが必要だと言わんばかりに
実像を見せてはならないと言わんばかりに

くたびれた老人どもが、やたら吠えている
「何だ、その体たらくは」と

お前は何時まで纏わりつくつもりだ
自由の女神と同じような相貌をしてはいるが

自由に疲れ、生を持て余す者たちは
紫色の銀河を漠然と夢想している

宗教家が決して近づかない場所

再生創造家が目をそむける場所

大衆は為政者の仮面に踊らされることを望んでいる
喪服を身に纏った子供たちの長い列

遥か遠くで小さく音が木霊した
微かな地面の揺れ

ちりちりとした痛みが走る
30 年なんて地学的には短いだろう

(2013.3.30)